

塾生通信 20, pp. 4-5, 2007.

「硫黄島からの手紙」に寄せて

藤井 聡

ある出張の帰り、機内にて一つの映画を見た。クリント・イーストウッド監督の「硫黄島からの手紙」である。この映画が封切られて以来、日本にはにわかには IWO JIMA プームとでも言うものが訪れ、例えば、硫黄島における日本軍の戦いに関わる様々な書籍が、あちこちの書店で平積みされている。

筆者は、この「硫黄島からの手紙」を含めた硫黄島二部作が、米国人であるところのクリント・イーストウッド監督によって、全キャストが日本人、かつ全編日本語にて作成され、日本で封切られるという事実を初めて知った時から、ある種の苛立ちの感情を覚えずにはいられなかった。その苛立ちは、おおよそ次のようなところから来る苛立ちである。

——自分個人の精神の流れというものがかりそめにもあるとするなら、その流れの最も深い部分に、連綿と繋がる日本と名付けられたある種の流れが胚胎しているように思えてならない。そしてその精神に胚胎している日本

という流れの形に、硫黄島での戦いに象徴される米国との戦いが重大な影響を及ぼしていることもまた間違いない。そうである以上、この硫黄島での戦いについて、一つの流れとしての日本を宿した「日本人」に対して語るべき者は、同じくその日本を宿した「日本人」でなければならぬ。もちろん、硫黄島での戦いについて日本人以外が語るべきでない、とまでは思わない。なぜなら、日本人以外の者が日本人以外の者に対して硫黄島での戦いについて語ることに、ある種の意味が宿ることは十分にあり得るからだ。しかし、日本人以外が硫黄島での戦いを語るのなら、それは、日本人以外に対して語られるべきなのであって、日本人に対して語られるべきではない。少なくとも、硫黄島での戦いに象徴される米国との戦いは、その様に思える程に、日本人にとって真剣なものであったに違いないと思えるからである。しかし、この「硫黄島からの手紙」は、明らかに「日本人以外の者」が、「日本人」に対して硫黄島を語るものである。そしてあるうことか、それを語るのは、圧倒的な軍事力で硫黄島を占拠した米国側の者なのである。そうであるにも関わらず、今現在、日本と名付けられた土地に国籍を持つ多くの者どもが、それを喜々として受け入れている。彼らにおいてすら、その精神の深い部分に日本という流れが僅かなりとも胚胎しているであら

うにも関わらずに、である。そうであるのなら、硫黄島での戦いで圧倒的物量によって硫黄島を占拠した米国が語る「硫黄島からの手紙」を、有り難く、喜々として受け入る、日本と名付けられた地に住まう者どもは皆、自らの心の中の日本という一つの流れに対して重大な冒流行為を働いているのだと断ぜざるを得ない。——。筆者が、「硫黄島からの手紙」の日本国内での封切りの報を耳にした時から感じ続けていた「苛立ち」とは、こうした冒流行為が、それこそ、その映画を見る人間の数だけ行われているであろう、ということに対するものであった。

こうした苛立ちを持つ筆者にとって、その映画を見ること自体にためらいの念があったことは言うまでもない。ただし、現代における日本の映画の衰弱ぶりを考えるなら、この「硫黄島からの手紙」は、戦争を描く映画として完璧なものとは言えないまでも、昨今撮られてきた戦争を描くいくつかの邦画に比して、それなりの映画に仕上がっているであろうとの予期を抱いていたこともまた事実であった。果たして、その映画の内容は、残念ながらも言うべきか、事前の筆者の予期に違わずいくつかの現代日本の戦争映画よりも格段によく仕上げられていた。現代の日本映画のおおよそに漂う安易なヒューマニズムはそこかしこに垣間見えるものの、その臭味は現代の日本映画のそれよりはるかに

と少ないものであった。戦後日本の中で繰り返して喧伝されてきた戦前の日本軍の「下劣な姿」を描写しようとしている様子も見られるものの、物量の観点から圧倒的な不利にある日本軍の戦いに宿る真剣さとその真実を描写しようとする態度も十分に見られるようにも思えた。そして、日本兵と同じく、米兵の下劣な姿もまた描写しようとする意図が十分に読みとれた。すなわち、クリント・イーストウッドは、彼の想像力の及ぶ範囲で、この硫黄島での戦いを可能な限り多面的に描いて見せようとしたのであり、その想像力は、現代の日本の戦争映画のそれを凌駕するものであったのである。

繰り返し言おう。日本の戦争を日本人に対して語るべきは、日本人である。しかし残念ながら、今の日本人には、かの戦争の真実を物語るほどの力量も、そしてそれを理解する力量も、著しく喪失してしまっているのである。三島由紀夫はかつて、小説「英霊の声」の中で、特攻隊員の、まさに敵艦に特攻するその瞬間の状況を描いて見せている。そこでは、敵艦にまさに激突するその刹那に至るまでに、特攻隊員が目にするものの一つ一つが三島由紀夫のあらん限りの想像力をもってして描写されている。その想像力は、クリント・イーストウッドのそれに引けを取らないどころか、それを遙かに凌駕するものであった。しかし、今日の日本は、三島

の想像力は言うまでもなく、クリント・イーストウッドのそれですら、上回ることができない程に脆弱なものになり果てたのであった。

かつて日本は、米国との戦において敗れた。そしてその後、GHQの占領統治を経て現在に至るまで、一貫して日本の制度、精神の解体が進められてきた。そして、このクリント・イーストウッドの「硫黄島の手紙」は、その解体が、最も深い部分まで到達しつつあるということを暗示している。日本は今や、米国から憲法や安全保障、パンや娯楽、そして、東京裁判に象徴される国家的次元における戦争解釈のみではなく、民族としての戦争解釈までも輸入しようとしているのである。解釈を放棄した民族において歴史の喪失は免れ得ない。ましてや、自立自尊など望むべくもないのである。